

愛育班活動の地域住民による評価と今後の活動のあり方

佐藤 禮子¹

【要約】愛育班活動の今後の発展拡充を図るために、サービスの受け手である地域住民の愛育班活動に対する評価を把握し、生活者の視点に立った母子保健のニーズに添えていけるよう、今後の活動について検討を行った。資料は平成5年度、地域住民の愛育班活動に対する評価をみる目的で行った調査をもとに、この中の自由記載欄に寄せられた生の声を整理し検討した。本調査では、6割の住民がこの活動は地域に役だっていると回答し、7割以上の住民がこの活動の今後の必要性を認めていた。しかし、活動方法などに、改善の余地があることも指摘されていた。

見出語：愛育会、地域組織、母子保健、健康づくり、まちづくり、市町村、保健所

【研究目的】

昨年本研究班調査において、愛育班活動に対する住民の評価を把握するために、妊娠中の母親や子育て中の母親のいる世帯を対象にアンケート調査を行った。

調査結果では、愛育班活動に対して6割以上の地域住民が役に立つ活動と評価し、7割以上の住民が今後も活動の継続を望んでいることは前回報告のとおりである。しかし、アンケート自由記載の中には住民の愛育班活動に対する問題提起などが多く含まれている。これらの中から愛育班活動の中心をなす訪問（声かけ）に関する住民の声に焦点をあて、今後の愛育班活動の具体的な改善や対策について検討することとした。

【研究方法】

前回調査で回収された537件（解答率81.

1%）の中に記されている72人、89件の自由記載の中から、母子保健と訪問（声かけ）に関するものを取り上げ、現状を分析すると共に今後のあり方を検討した。

【結果と考察】

1) 指導や助言を求めている住民の声（アンケート自由記載より）

- ①「保健婦さんや助産婦さんのような有資格者の方が安心できる」
- ②「班員は何も資格のない人なので、あまり立ち入って話をすべきではない」
- ③「愛育班はしろうと衆の集まりで、指導する立場ではないと思うが、もっと専門的なことを勉強してもらったらどうか」
- ④「初めての子供でわからないことがたくさんあった。ほんのちょっとしたことでも親にとってほわからないものなので、もっと

¹ 社会福祉法人恩賜財団母子愛育会

気軽に相談できればいいと思うのだが」

⑤「もっと家族のことを指導してもらわないと訪問の意味がない」

⑥「形式的な訪問にならないように中身のある訪問を続けて欲しい」

⑦「ただ、毎月訪問にきて記録を書いているだけでは意味がない。何か問題がある時には、はっきりと説明して、今後どうするか助言してもらいたい」

⑧「保健婦さんからの連絡を面倒がらずに役立てほしい」

⑨「保健婦さんの助言などを適切に伝えてくれない。もっと親身になって声かけしてほしい」

①②のように、地域住民は専門職ではない愛育班員に対して「指導や助言」は期待していない。しかし、③のようにわざわざ訪問してくれるなら、ある程度の指導は期待している様子も伺える。また、④のように、気楽な相談にに応じて欲しいという意見や⑤のように指導してもらわないと意味がないという積極的な関わりを求める人もいる。これらの状況を認識した上で愛育班員による家庭訪問（声かけ）がどのような役割をもっているかを明確にしたい。

2) 愛育班員の「声かけ訪問」

愛育班員が行う「声かけ」や「声かけ訪問」「家庭訪問」（以下「声かけ」とする）とは、地域社会の中で孤立しがちな母親に対して子育てをしてきた先輩として、その子の成長や健康を共に喜び、育児の不安や戸惑いに耳を傾けることである。愛育班員が地域の母親とこのような関係が芽生えてくると、育児や健康に関する工夫や体験、生活の知恵などをアドバイスしたり、話し合ったりするきっかけができる。

また、乳幼児健診や予防接種、育児相談などの健診の勧奨や、育児学級、妊婦学級など

の受講の勧奨、その他情報の提供などを目的とした「声かけ」もなされているが、それらの出会いを通して、新たな交流が芽生えたり、地域の健康問題が把握され、地域の問題として解決に向けた取り組みなどが話し合われる。

愛育班活動は専門的な知識を地域住民に提供したり、指導していくのではなく、健康づくりを目指して、日常生活で見られる健康に関する話題を地域社会のつながりの中で発見し、地域住民の立場で改善へ向けて方法を考え、実行していく活動である。

3) 「声かけ」と「話しあい」

⑥⑦で指摘されているように、「声かけ」そのものが、地域住民個々の健康に役立ち、地域の共通した健康問題として解決したり、実践していくことに生かされなくてはならない。

「声かけ」によって、見たり、聞いたり、話したり、感じたことを「訪問カード」（簡単なメモと考えてよい）に記録する。この「訪問カード」に書かれている内容を整理し、話し合いがなされる。その結果、生活者の立場に立った生活の工夫や育児に関する地域の問題が見えてくる。この生活者の立場に立った生々しい話題が単なる地域の話題として立ち消えていかないのは、班員どうしの「話し合い」と保健婦による専門的な助言によって生活に密着した自分達の健康問題として確認されていくからである。

そして、「声かけ」として再び自分の家庭や地域社会に持ち帰り、地域にその話題が広がっていく。この「声かけ」と「話し合い」の仕組みが愛育班活動の軸となって色々な事業（育児グループ等の活動）が展開されている。

4) 連絡カードの活用

班員が記録した「訪問カード」は班員から分班長に渡され、分班内の情報として確認した後班長に、班長が班全体の様子を確認した後、保健婦にその訪問カードを送る。保健婦は訪問カードを読み、班員個々に対するアドバイスや伝えてもらいたい情報などを連絡カードに記して、班長へ、そして分班長から班員へと送り返す。その内容は班員が地域の住民に伝えていく。

保健婦による家庭訪問や個別の指導が必要と判断した場合もこのルールに添って班員に連絡をし、班員を通じて住民が了解、納得した上で家庭訪問等を行うことが重要である。また、「声かけ」の結果、早急に対応した方が良いと判断した場合は班員が直接保健婦に連絡をとったり、班長等に相談をして、臨機応変に適切な対応をしていくが、訪問カードにはそのことを記して、ルールに添って訪問カードを送っていくことが必要である。

⑧⑨でも指摘されているように、保健婦のアドバイスや指導事項が地域住民に適切に伝わるよう「訪問カード」や「連絡カード」の役割とその活用の仕方等の班員教育、班長教育等を通じて周知徹底していくことが今後、重要であると確認できた。

この基本に添ったルールを守ることが、会員（住民）からの信頼を得ることであり、住民の意志を尊重し、プライバシー保護の基本ともなっている。

5) プライバシーに関する問題提起

- ①「愛育班員さんが相談相手になった場合、相手の秘密を必ず守ることが大切だと思う。
- ②「おしゃべりの人が多いので相談があっても言いにくいと思う」
- ③「個人のことなど他人にとやかく言われたくない人が多いのではないか」

④「最近の若いお母さんはあまり、関わりたくないと思っている様だ」

①②については、世間話のような内容であっても、愛育班員の立場で知り得たことは他の人に話さないこと。また、分班長会議などで地域の情報として知ったことを個人のうわさとして話題にしないこと。これらのことは、班員教育やその他の機会に常に確認してきたことである。また、愛育班では妊娠届けや検診の結果など行政の立場で把握された個人の情報をもって訪問することはないことも確認していきたい。

④のように、最近の母親は他人から指示され、指摘されることに抵抗がある。むしろ、気楽な出会いからスタートした声かけなどの関わりを通じて、わが子の成長を確認し、ほめてもらえることや、認めてもらえることによって育児の大変さや育児の不安が解消されていくようである。指示や指摘ではなく話を聞いてくれる愛育班員。子供たちの成長やかわいさを共に喜んでくれる先輩としての役割を担っていくことが望ましい。

6) 家庭訪問に期待している住民

- ①「もう少し、愛育班らしい活動（訪問）をして欲しいと思う」
 - ②「プライバシーの問題などで苦勞されることも多いと思うが、できるだけ多くの人に声かけしてほしい」
 - ③「初めての子でわからないことが多いので気軽に相談できれば良いと思う」
- 「家庭訪問」という言葉からは、かたぐるしい責任感のようなものが感じられる。「どんな風に訪問すればいいの?」「何を言えばいいの?」「歓迎されなかったらどうしよう」「訪問先での会話がよくできない」等各地の班員のこんな悩みも多い。
- 愛育班員が受け持ち世帯のすべての人に月1回程度声をかける「家庭訪問」が望まし

いことではあるが、班員も会員も忙しく過ごしている。不在の人や働いている人も多くなっている。わざわざ訪問されることを嫌がる人も多い。しかし、一定の生活圏の中で生活しているため、隣り近所のおつき合いや出会いの機会が何回かある。例えば庭先で、お店の前で、道端で、地域の会合の場で、バスの停留所で、ちょっとした出会いの場をチャンスに、健康の確認として「お元気ですか」の声かけをきっかけに、できる範囲内での家族や地域の健康問題を話題にしていけばよいと考えている。

日頃、隣近所で交わしている気候の挨拶や生活のこと、衣食住に関することや環境のこと、子どもたちやお年寄りのことが、健康や身体のことと繋がっていくかもしれない。

「寒くなりましたね、お元気ですか、空気が乾燥して、のどがカラカラ。何か良い工夫はないかしら」「赤ちゃん大きくなりましたね。3か月過ぎると夜、続けて寝るようになるから、楽になりますよ」こんな会話が交わされ、地域社会のふれあいが生まれる。

しかし、そのように話題を広げていけるようになるには、色々な知識や情報を持っていないと話が弾まない。

生活に密着した知識や情報を得るための「話し合いと学習」が大きな役割を果たして

いると思われる。

【おわりに】

健康づくりを目指した住民の主体的な組織活動「愛育班」が住民から信頼され地域に浸透していくために、愛育班員1人1人が活動の基本を学び、確認していくことが必要である。また、サービスを受ける側の地域住民の自発的な意志があって、成り立つ活動でもあるので、地域住民が愛育班活動を理解し、地域に受け入れられるような地域のニーズを「声かけ」や「話し合い」の中から把握し、展開していくことが大切である。アンケートの自由記載の中に数多く記されている愛育班活動に対する要望は、乳幼児を対象にしたグループの開催や地域社会の中で育児を支えていく役割であった。実際、活動の多くは地域のニーズに応えた育児グループのような活動を多く取り入れている。

最後に、この愛育班活動が「健康づくり」を目指し、主体的に、生活者の視点に立った地域の健康問題に取り組んでいくためには行政即ち地域住民と最も近いところにいる保健婦の指導、援助が特に重要であることは、地域組織活動がその目的に添って意図的、継続的に関わっていくことが必要であると示されている通りである。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



【要約】愛育班活動の今後の発展拡充を図るために、サービスの受け手である地域住民の愛育班活動に対する評価を把握し、生活着の視点に立った母子保健のニーズに応えていけるよう、今後の活動について検討を行った。資料は平成5年度、地域住民の愛育班活動に対する評価をみる目的で行った調査をもとに、この中の自由記載欄に寄せられた生の声を整理し検討した。本調査では、6割の住民がこの活動は地域に役だっていると回答し、7割以上の住民がこの活動の今後の必要性を認めていた。しかし、活動方法などに、改善の余地があることも指摘されていた。